

幽波紋使いは静かに楽
しむ

rainバレルーk

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは『ジョジョ』でも『黄金の精神』を持つわけでもない、ただの『オカシナ』人物が主人公である

目次

幽波紋使いは静かに楽しむ | 1

幽波紋使いは静かに楽しむ

僕の名前は岸野齋記。きしのさいき

親しい人からは『キキ』や『キサイ』と呼ばれる。

僕は結構このアダ名を気に入ってる。

そんな僕は所謂《転生者》ってヤツだ。

そこ君？僕の頭は正常だ。だから、救急に電話しようとしている手を納めてくれよ？
そんな僕は他の転生者と同じく《特典》ってヤツを貰っている。その特典ってのは、あの有名な作品【ジョジョの奇妙な冒険】に出てくる『スタンド』だ。しかも『オリジナル』。

しかし、そのスタンドの素質があるかどうかを僕がわかるハズもなく、転生する前に僕はジョジョの奇妙な冒険に出てくるキーアイテム『矢』を『心臓』に『刺された』。そして、そのまま『渦』の中に突き落とされた・・・のだが・・・

僕は生まれてこのかた『運良く』、『騒動』にも巻き込まれずにスクスクと育った。おかげで自分のスタンドの能力を調べたり、鍛える事が出来た。このまま『平穏』な日常が

続くと思つて『いた』。

『いた』なんて言う過去形を使うには理由がある。

今から三ヶ月前、僕はアメリカ留学から帰つて来た。

実に楽しい留学でまさに『青春』つて言うにはピツタリのモノだった。

留学先のクラスメイトと『婚約』されそうになったが・・・

・・・話を元に戻そう。

その留学から帰つて来た僕は御世話になっている大学の『教授』の部屋に向かうと・・

ガチャリ

「ただいま戻りました教授——つてアレ？」

「！」ビクッ

「だ、誰？」

部屋には『黒髪』の小さな『女の子』と『アツシユ』の中学生くらいの『男の子』が行儀良く座つていた・・・

「・・・ハア・・・ヤレヤレだぜ・・・」

僕は『ジョジョ第3部』の主人公のように溜め息を吐いた

ガチャリ

「おや？君は岸野くんかい？」

すると、奥の部屋から『ボサボサ髪』に『黒淵眼鏡』、『白衣』という医者のような『男性』が出てきた。

僕はすぐさま自分のスタンド、『ザ・ラスト・グッドナイト』を出すと・・・

「オラアッ！」

「ぐげえッ！」

「え、ええッ!?!」

この『教授』ペドフィリアの首を鷲掴みにして持ち上げた。僕のスタンドはパワーがCだが、一人は何とか持ち上げられる。

「おいコラ、『皇』すめらぎかなえ鼎』教授？いつからアンタは『ロリコン』から『ペドフィリア』に進化したんだ？あ”あ”ん？」

「ぐ、苦”じいッ!?!」、誤解だ！岸野くん！」

ジタバタと教授は暴れる。

ここで話が変わるが、僕のスタンド『ザ・ラスト・グッドナイト』は『震動を作り出す』能力を持っている。

このスタンド能力がわかった時、僕は『前世』で好きだったアニメ『コードギアス』に

出てくる人型機動兵器『K M F』の『紅蓮』・『月下（試作機）』に装備されていた『輻射波動機構』を思い出した。なので……

「弾けろッ！変態野郎ッ!!!」

このまま輻射熱で溶かしてやろうかと思った……のだが

「教授を離せッ！」シャキン

「『切』くんッ！」

アツシユの男の子が僕に懐から取り出した『鋏』を向けた。

僕は女の子の叫んだ男の子の『名前』に疑問符を浮かべた後、驚きとともにある『前世の記憶』が甦った。

「『断裁分離のクライムエッジ』……？」スルリ

「え……ッ!？」

「がはっ」バタリ

僕は教授の首を離し、キョトンとして驚く『灰村切』と『武者小路祝』を見ながら

「ヤレヤレ．．．やっとか．．．シシシ♪」

僕は『平和』^{退屈}な日常が終わる時を『心』で感じた．．．

このあと、僕は騒ぎを聞きつけた教授のアシスタント、『病院坂法子』^{びょういんざかほうち}ちゃんに頼み
ラリアットを喰らった。奥歯にヒビが入るぐらい、キツイヤツを．．．